St. Luke's International University Repository

Web 上でのヘルス・ボランティア学習支援プログラム試用の評価・改善とカリキュラム化

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田代, 順子, 長松, 康子, 松谷, 美和子, 菱沼, 典子, 及川, 郁子, 平林, 優子, 麻原, きよみ, 大森, 純子., 佐居, 由美, Tashiro, Junko, Nagamatsu, Yasuko, Matsutani, Miwako, Hishinuma, Noriko, Oikawa, Ikuko, Hirabayashi, Yuko, Asahara, Kiyomi, Junko, Omori, Sakyo, Yumi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00015063

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

―― 報　告 ――

Web 上でのヘルス・ボランティア学習支援プログラム試用の評価・改善とカリキュラム化

田代順子[1)]，長松康子[1)]，松谷美和子[1)]
菱沼典子[1)]，及川郁子[1)]，平林優子[1)]
麻原きよみ[1)]，大森純子[1)]，佐居由美[1)]

抄　録

平成 17 年 1 月から Web 上でボランティア学生が学習できるヘルス・ボランティア・コミュニティ・e- センターを開発してきた。本論文では，本 e- センターを学生と研究者の視点から評価し，その結果をもとにサービス・ラーニングの科目概要を作成したので報告する。評価方法は，e- センター内の①一般公開ボランティア学習サイトの利用状況，②学生サイトの活動ログの試用状況，③活動ログ試用学生と不試用学生の評価，④研究者の支援活動に関する評価，により過程評価した。研究の倫理的配慮として，学生に研究協力は自由で，協力中止の自由や，学業成績とは無関係であること，などを説明し，同意書に署名してもらった。本研究計画書は，学内の研究倫理審査委員会で承認を受けた（承認番号 07-035）。

評価結果：①一般学習サイトへのアクセスは 2007 年 1 月からの 2 年間で，1 万 4,768 件であった。② 1 年間で活動ログは，登録学生 122 名中 9 名が試用し，延べ 30 件の活動ログが提出された。活動ログには，活動内容，感じたこと・考えたこと，困ったこと，今後，に沿って記録されていた。③活動ログの試用に関した学生評価は，⑴現在は，ボランティアなので活動ログ作成の動機付けとはならない，⑵学生間の連絡や記録は携帯メールを使用しており，PC 上の Web サイトを使うには時間と労力が必要，⑶現在の Web では他学生と経験を共有できない，⑷デジタルに馴染んでいない，などであった。④研究者の評価意見では，半数以上の研究者が，Web 上での支援が未知であり関われなかったと評価した。しかし，研究者は，学生の書いた活動ノートでの活動内容や振り返り状況は，学生の学習上重要であると評価した。

この評価をもとに，ボランティア活動が活発である学部 1・2 年生を対象とし，Web 上での自己学習と併せてミーティングでの活動体験の共有と振り返りができる機会を提供するサービス・ラーニング科目を作成した。今後，この科目の学習支援を実践し学生の学びと評価を受けさらに発展させる計画である。

キーワード：ヘルス・ボランディア，サービス・ラーニング，e- ラーニング，看護大学生，社会参加

Ⅰ．はじめに

日本におけるボランティア活動は活発となっており，ボランティア活動を教育に取り入れている大学は増えている（佐々木，2003）。筆者らの教育機関も，看護大学としての特色なのか，保健・医療関連のボランティアをしている学生は少なくない。

筆者らは 2002 ～ 2004 年度に学生が行っている地域・社会でのボランティア活動の教育ニーズを調査した（香春他，2005）。この研究成果から，看護学生がさまざまなボランティア活動をしている事実と，同時に，活動からの学びをさらに広げ・深める必要性が抽出された。筆者らは，その学習ニーズに沿って学生ボランティア学習の支援教育プログラムの指針を開発した（香春他，2005）。

2005 年からは，この開発した指針に沿って，学生が Web 上でボランティアについて学習できるヘルス・ボランティア・コミュニティ・e- センター（以下，e- セ

受付日 2009 年 2 月 27 日　受理日 2009 年 7 月 14 日
1）聖路加看護大学

ンター）の開発に着手した。このe-センター開発のねらいは，学生がボランティア活動を通じて，地域社会への責任性を学ぶ「サービス・ラーニング」の教育アプローチ（松谷他，2004）を応用し，具体的には，学生がボランティア体験を「リフレクション（活動ログ）」に記録し，その記録を通して活動を振り返り，学ぶことであった。さらに，サービス・ラーニングの科目として開講準備をすることであった。

本研究では，学生がヘルス・ボランティアとして現在活動している4領域；①市民への健康情報の提供や専門家の紹介などの活動，②在宅・地域でのボランティア，③病院でのボランティア，④海外でのボランティア，に焦点をあてた。

本e-センターのサイトは，一般に公開しているヘルス・ボランティアについて学習するサイトと，ヘルス・ボランティアをしている学生が登録して使用するサイトを表1のように作成した。2007年1月からこのe-センターの試用を始めた（田代他，2007a）。

本論文では，e-センターの，①一般公開ボランティア学習サイトの利用状況，②学生サイトの「リフレクション（活動ログ）」の試用状況，③活動ログ試用学生と不採用学生の評価，④研究者の支援活動に関する評価，の4側面から過程評価を報告する。さらに，この評価に基づき，学生のヘルス・ボランティア学習支援を引き続き行うために，サービス・ラーニングの科目概要を作成したので報告をする。

Ⅱ．方法

1．評価方法

1）一般公開ボランティア学習サイトの利用状況

本学習サイトへの全アクセス数を月別にカウントした。

表1　『ヘルス・ボランティア・コニュニティ・e-センター』のコンテンツ

一般公開のボランティア学習サイト（計9コンテンツ）	ボランティア「学生サイト」登録制（5コンテンツ）
① Webサイトの紹介 ②ボランティアとは ③ボランティアの基本姿勢 ④コミュニケーションについて ⑤ヘルス・ボランティアの1日 ⑥みんなの活動の安全を守るために ⑦ボランティアギャラリー ⑧ボランティア情報リンク ⑨スペシャルインタビュー	①ニュース ②フォーラム ③リフレクション（活動ログ） ④ e-ラーニング（コミュニケーション） ⑤ボランティアリンク

2）学生サイトの評価

⑴研究協力者の募集

各ボランティア代表学生の協力を得て，グループメールで「研究協力者のお願い」を配信してもらい，同時に，学内にも掲示した。加えて説明会を開催し，「研究協力者のお願い」を配布し，口頭で説明した。研究協力者になることを同意した学生には，研究協力同意書に署名をしてもらい研究協力者とした。

⑵学生Webの試用方法

研究協力者はID，パスワードを登録し，学生サイトに自由にアクセスできるようにした。ボランティア活動を活動ログに書き込み，必要時，研究者らへ質問・助言を希望できるようにした。

⑶学生Web活用と活動ログの評価

Webの活用状況と報告された活動ログ活用数とその内容を評価データとした。学生Webの活動ログおよび活動まとめの記録状況の内容分析を行った。

加えて，研究協力者のなかで，試用しなかった者へのグループないし個別の面接調査を行った。面接記録をもとに，内容分析し要約ノートを作成した。

3）研究者らのWeb試用の評価

Webコンテンツ作成とWeb学習支援プログラム試用の経験，および科目概要作成に向けての意見を求める評価票を作成した。8名の研究者メンバーから評価票を回収し，意見をまとめた。

2．サービス・ラーニングの科目概要の作成

上記の評価の結果を踏まえ，Webを活用したサービス・ラーニングの実施へ向けて，シラバス案を作成した。

3．研究倫理的配慮

本研究は研究協力者が学生であるため，研究参加に関して2段階の手続きを踏んだ。はじめに研究協力者になりうる学生へ確実に呼びかけたのち，説明会を開催して，参加の任意性を確保した。また，研究参加は大学における教育とは無関係であること，いつでも中止・辞退できること，そして，すべての個別の情報は匿名化し，成果の公表時には匿名で行うことを説明・確認した。参加の意志のあった者から同意書に署名してもらい研究協力者として研究に参加してもらった。所属機関で，研究倫理審査を受けた（承認番号07-035）。

Ⅲ．評価結果

1．一般公開ボランティア学習サイトの利用状況

本サイトは，開始した2007年1月から2008年11月までの2年間で，1万4,768件のアクセスを数え，月ごとのアクセス数は1年目が700件前後で2年目も600件前後であった。途中，Webのアクセスの場所が不明確

で利用できなかったと指摘があり，アクセスがしやすいサイトから入れるよう 2008 年 4 月から改良した。

2．学生サイトの活動ログの試用状況

研究協力者として学生 Web へ登録した者は 122 名であった。このうち 9 名が活動ログを試用し，延べ 30 件活動ログの提出があった。

30 件の内容を，①活動内容，②感じたこと・考えたこと，③困ったこと，④今後，に分け一覧表にした（表２）。

９名の学生の報告回数は，７回から１回であった。７回から４回提出した学生は各１名で，３回の提出者が最も多く３名，２回が１名，１回が２名であり，平均３回であった。

ボランティアの場は，成人病棟（４名，15 回），小児

表２　成人・小児病棟，在宅での活動ログ概要

活動内容	感じたこと・考えたこと	困ったこと	今後
成人病棟： 患者と散歩，掃除，70 代患者との談話，配膳・下膳，食事介助，食事の記録･入力，体位変換，吸引，排泄介助，食事介助（夜勤），洗面準備・片づけ，患者と談話，ガーゼの補充，物品補充，薬剤，輸血室からの物品調達，タオル交換，花の水かえ	・活動で色々感じることがあるが，書き残してないともったいない。 ・夜勤で緊張し，患者さんから色々教えてもらった。 ・患者さんに付き添う責任の重さを感じた。 ・患者さんとの会話で元気づけられ学ばされる。 ・認知症の患者さんとの会話は繰り返しが多いが，それで患者さんの気が晴れるのであればよいと思う。 ・患者さんやナースから喜ばれ嬉しくなった。 ・車椅子の高齢患者の食事介助で難しいことは，食べる順序とコミュニケーション。 ・微粒子防止用マスクをつけて食事介助をした。 ・患者さんの食事の要求に応じて迅速に変更されていた。どのようにされているのだろうか。 ・ナースの働き方が直接見れるので，興味深い。	・話しかけるタイミングと話題の選択。 ・夜患者さんが不安に思うことは何か。 ・食事中に話しかけることはよいのだろうか。 ・笑顔は大切だと思った。 ・患者さんの要求通りにできなくてどのように対処するのだろうか。 ・食事中，患者さんが答えなくても，話かけてもよいのだろうか。 ・下膳のタイミングと返答がないときの対応。 ・ナースに迷惑をかけているのではないか。	・メンバーに相談する。 ・積極的にコミュニケーションを図る。 ・吸引をもう一度復習する。 ・患者さんと話ができたらよいなと思う。 ・心に余裕のあるボランティアになりたい。 ・ボランティアで関わった人々が嬉しければ，よい私の自己満足になると思う。 ・ナースの名前を覚えたい。 ・マスクで顔が見えなくても温もりが感じられる看護をしたい。 ・2 時間では遣り残しがあるので，延長したい。
在宅ケア： 痰吸引，ネブライザー，タッピング，スクィージング，アンビューバッグ，呼吸器回路点検，回路の水きり，加湿器蒸留水補充，経管栄養注入，与薬，顔ふき，整髪，体位変換，排泄介助（ベッド上），飲水介助，尿量測定と記入，口腔ケア，トイレ介助（ベッド上），吸引器洗浄，吸引セット交換，気切部消毒，カーゼ交換，カフ圧入れ替え，胃瘻部ケア，バイタルサイン測定，上肢の運動・マッサージ	・慣れたので落ち着いてできるようになった。 ・患者さんが伝えたいことが素早くわかるようになってきた。 ・手際よくできない。 ・慣れからミスしないように（換気量の調節）。 ・側管からの唾液が多くなった。 ・文字盤でのコミュニケーションは６ヶ月後には困難と思った。 ・排便に支障があった。 ・教員に指導された腰部温罨法を実施し，「気持ちが良く，1 時間も温かかった」と，そして，翌朝，排便があった。 ・呼吸器が命をつなぐと実感した。 ・１ヶ月に１～２回なので，身につかないことがある。 ・患者さんの言葉が聞き取れない。 ・患者家族が 2 年生の私に期待するので，恐ろしくなる。 ・家族はヘルパーさんとのやりとりに苦心しているよう。	・カフの空気注入を家族に見てもらい問題ないといわれるが，時々抜ける。特に，夜間が心配。 ・腰部温罨法を行いたいが，注意　点，リスクは何だろうか。 ・温罨法は昼と夜どちらがよいか。 ・ヘルパーさんへの引き継ぎができず，いる時間が長引いた。 ・朝まで体力がもたなくなった。 ・以前より気が引き締められなくなった。	・１ヶ月に２回は必ず行きたい。 ・一つひとつを確実に安全に手早く行えるようしたい。 ・文字盤に頼りすぎず伝の心の練習も積極的に楽しみながら行っていきたい。 ・学業への支障を最小限にするために，予定を調整し，自分自身の無駄な緊張を和らげる努力をしたい。 ・安楽な体位が提供できるよう文献を読んだり実際行ったりして研究したい。
小児病棟： 乳児の子守り，お絵かき，トランプ，紙芝居，ごっこ遊び	・本当に可愛かった。 ・病棟にお雛様が飾ってあって，文化に触れる大事な機会と感じた。 ・思っている以上に子どもは多くのことを知っている。・抱っこは難しい。 ・新たな病棟メンバーで緊張， ・親が Dr. からの説明のため，児から離れ，ボランティアとして関われた。 ・医師が白衣を脱いで，関わっており，（小児医療者としての）姿勢を学んだ。	・年齢に応じた話口調，遊び相手。 ・子どもの個別性を見抜くこと。 ・寝ているとき，酸素飽和度が下がって，覚醒しそうなときに，力が入って呼吸していないようだったが，よくあることだろうか。	・積極的にコミュニケーションを図ろう ・発達段階とか授業でやったことを重ね合わせて活動したい。

病棟（４名，５回），障害児保育（２名，２回），在宅ケア（１名，６回）であった。また，小児病棟ボランティアグループとして地域の他施設（２回）でボランティアに参加していた。また，地域での学習障害児へのボランティア活動も１件あった。

１）活動内容

活動内容は，ボランティアの場により異なっていた。成人病棟では，夕食前後の時間であるため，配膳･下膳･その記録の入力，患者との談話であった。小児病棟では，友達として遊び相手となる活動をしていた。在宅ケアでは，24 時間ケアの必要な呼吸管理，排泄，体位交換，清潔ケアを家族とともに行っていた。地域の障害児の保育，学習障害児のリレーションプログラムでは，遊びをしながら子どもとの関わりをもっていた。

２）感じた・考えたこと

感じたこと・考えたこととして報告された内容を分析すると，対人関係でのコミュニケーションで考えたこと，他者理解について考えたこと，そして，看護技術がある場合には，実施に際してのタイミングなど実践に関わること，が報告されていた。

３）困ったこと

困ったこととして報告された内容は，患者理解や，患者，家族，そして病棟ナースとの関わりはこれでよかったのかとの疑問が報告されていた。

４）今後

今後の欄には，積極的に今後やりたいことが報告されていた。

３．活動ログ試用学生と不試用学生の評価

活動ログを試用した９名中協力の得られた５名に個別面接で，不試用の 113 名中，協力の得られた６名にはグループ面接で評価意見を聞いた。質問は，①ボランティア活動内容，②活動ログについて，③活動ログの評価，④ Web への要望についてであった。面接で語られた評価の代表的なものを表３に示した。

学生の肯定的評価は，試用した学生から，「後で読み返せてよかった」「活動が記録されているので，事故などの時に記録があるので安心」「知らない教員からアドバイスもらえてよかった」との意見があった。その反面，e- センターの改善を必要とする批判的意見もあり，５点に集約できた。⑴自主的グループで，ボランティア活動をしている活動では，グループ内のコミュニケーションが携帯電話やミーティングで行われている。記録は義務ではないので，記録をする発想はない。⑵コンピューターを使う記録は，時間とエネルギーが必要である。⑶ Web 上で，他の学生の経験を参考にしたいが，現在の Web では他学生の経験の共有はできない。⑷デジタルに馴染んでいない。⑸コメントをもらう教員がわからないし，聞きにくい，などであった。

４．研究者の支援活動に関する評価

８名の研究者から評価を回収し，さらにそのうちの６名でグループ討議を行った。評価項目は，①研究者の学習支援活動について，②各コンテンツの評価，③活用のされ方，④学習支援活動，⑤実施に向けての評価，であった（表４）。

１）研究者の学習支援活動について

e- センター開発までは，「コンテンツ作成業者のコンペから始まったその経験は，ソフト開発会社や学生，病棟看護師，ボランティアコーディネーターとの協働とい

表３　活動ログを試用した学生と不試用の学生の評価意見

質問項目	活動ログ試用学生	活動ログ未試用学生
ボランティア活動内容	ナイトフレンド，在宅ケア	ナイトフレンド，ゴミ拾い，音楽ボランティア，障害児の遊び相手，孤児院訪問
活動ログについて	・グループのもっている**携帯でのメール**。 ・話し合いでの意見交換で**記録までしない**。	・記録を誘われても，**書こうとは思わない**。 ・**コンピューターは身近でない**。
活動ログの評価	・リフレクに書き込みもいいが，後で，読みかえせてよかった。 ・ボランティア活動が記録で残るので，事故になったときに安心だ。 ・直接知らない教員からアドバイスもらえてよかった。 ・**サイトへの入り方がわからない**。 ・パスワードが複雑で，その後，自分で変更できない。 ・**返信希望の先生がわからない**。 ・**どの先生も遠い**，若くて，**低学年でも知っている先生のほうが聞きやすい**。 ・掲示板に反応がないのであれば，書き込みしない。 ・登録制は，使える学生だけに限られる。	・教員からコメントしてもらえるが，**その他のボランティアの考えを知りたいが，読めないので興味を引かない**。 ・**アナログ派**なので，**コンピューターを使おうと思わない**。 ・自分の活動はノートに書くほうがよい。 ・コンピューターを使う**記録は，時間とエネルギーが必要**である。 ・携帯から記録できるとボランティアの帰りでも，記録ができればよいと思う。
Web への要望について	・**mixi みたいに書き込みにコメントできるようにしてほしい**。 ・もっとコメントがあるとよい。	・写真とかも使えると興味がもてる。

表４　研究者の評価概要一覧

評価の側面		評価内容
①学習支援活動（自由記載）		●e- センター開発までの過程： ・コンテンツ作成業者のコンペから始まったその経験は，ソフト開発会社や学生，病棟看護師，ボランティアコーディネーターとの協働というきわめて有意義な経験だった。 ・学生と一緒につくれて，学生の意見が理解できてよかったと考える。 ・小規模の大学での運用はコスト面でかなり厳しいことを実感した。 ●e- センター試用後の学習支援： ・関わり方がわからず，支援に関われなかった。 ・e- センターの試用開始時，学生に Web を使ってもらうために，まず，新たな学習資源を知ってもらう広報活動が必要であった。 ・支援の時期と期間が決まっていたほうが対応できやすい。 ・学生のリーダーとのパートナーシップと一緒の運営ができるが，学生と時間が合わない大変さがあった。 ・e- センター支援は，新たな体験であった。
②コンテンツ（5 点満点）	点数	
活動ログ	2.5	・PC メール機能で代用できる。 ・書くことは貴重で，書くことを支援するシステムとしては評価できる。 ・ログの公開は課題となる。
ニュース	2.5	・配信，入手も自分はしなかったが，学生には役立つものだったかもしれない。 ・ニュースの反応がわからなかった。 ・必要ではなかった。
フォーラム	2	・参加しなかった。 ・学生は自由に書いてる。
一般学習サイト，e- ラーニング：コミュニケーションを含む	2	・プログラムを作成できたことは有意義だったが，DVD などによって代用可能な内容であった。e- ラーニングならではの教材にするには，回答時間の設定や，同時リフレクション等のプログラムを含める工夫が必要であった。 ・小規模な毎日授業のある大学では対面のやりとりのほうが価値があると思われる。 ・コミュニケーションは，皆が学ぶべき内容であるが，このサイトの場所がわかりにくかった。
リンク	2.5	・リンクはよいと感じる。 ・リンクが適当であったかわからない。
③活用	2	・一部の学生が，毎回使ってくれた。 ・活用してくれた学生にとっては，ログで学びが理解できる。
④学習支援，活動	1	・実際の試用時には，ほとんど貢献できなかった。 ・サイトの管理に追われ，学習支援はできなかった。
⑤実施に向けての評価（自由記載）		●サービス・ラーニングの意義： ・単位が付与されるのではボランティアではなくなるのではないか。 ・サービス・ラーニングでは，看護師のたまごの活動内容というより，活動からの他者理解や，多面的理解の広がりや，チームの視点など社会性の学びの支援に焦点をあてるほうがよい。 ●実施に向けての見解： ・科目として開講すれば，学生の態度は変わってくるのではないか。 ・単位化されれば，学生はログを書くと思う。 ・上手に導入すれば，学生がさらに e- センターを活用すると考える。 ●実施の問題点： ・携帯電話からアクセスできないだろうか。 ・ボランティア活動のリーダーは，多様な動機付けで学生がボランティアに参加することで，まとめにくくならないだろうか。 ・ボランティア活動で２単位取得するに十分なほど学生がボランティア活動を何度もできるか心配。 ・教員にとってボランティアの支援とログを確認することは負担であった。 ●実施計画案： ・ボランティア自体とは区別して，ボランティアしている学生で，活動記録を書きながら学びたい学生が履修できるコースでよい。 ・Web 上の教育に，対面でのリフレクションなどの機会を１単位当たり最低２回ほど組み込むとよい。 ・学生と教員が集まってボランティア活動について話し合ったり，助言しあうというほうがいい。 ・単位を与えるレポート提出用とするならパソコンからのアクセスが現実的である。 ・専門的な内容は，アドバイザー教員が必要である。 ・今後，振り返りを中核としたプログラムとするとよい。

うきわめて有意義な経験だった」と報告した。しかし，e- センター試用後は試用準備活動の間，半数の研究者は，「関わり方がわからず，支援に関われなかった」と報告していた。

学生支援活動に関わった者は，「e- センターの試用開始時，研究協力者である学生に Web を使ってもらうために，まず，新たな学習資源を知ってもらう広報活動が必要であった」と報告した。また，「サイトの管理に追われ，学習支援はできなかった」と報告した。

事実，試用開始時には，研究協力者に試用方法のガイダンスを行った。この試用準備のための活動は，研究協力者に日常的に接する時間のある者が主に担当していた。

本 e- センターで学生に常に関わった者は，「研究協力者である学生と一緒に協働できた」ことには肯定的であったが，「質問がメールで送られてきても，実習指導期間で学外にいるときには，回答の返信が遅れることもあった」と報告した。また，「研究協力者と研究者との時間の調整には困難があった」と報告していた。

2）各コンテンツの評価

コンテンツごと（表４コンテンツ参照）に点数（５点満点）と意見（自由記載）で評価してもらった。

⑴活動ログは，PC メール機能で代用できるという意見も出された。しかし，大半は，活動ログで「感じたこと・考えたこと」を記録しながら，学習者自身が意識することを支援できるシステムとして重要であると評価した。

⑵ニュースは，関わった者からは，「ニュースを発信したが，反応がわからない」との報告であった。多くは，「学生には役に立つのかもしれないが，研究者としては積極的に発信も入手もしなかった」と報告された。

⑶フォーラムのサイトは，「研究協力者は自由に書いており，使い方としては学生間の意見交換の場となると思う」との評価がされた。

⑷ e- ラーニングで学ぶ「コミュニケーション」の内容は DVD で代用可能であったという意見もあった。しかし，「コミュニケーション」の教育内容は基本的で重要な知識であるので，今後，工夫をして全員の学生に活用してもらうようにすべき学習内容であるとの積極的な評価もあった。

⑸リンク先は，今後に向けて学生に適切であるかは再考の余地があるとの評価がなされた。

3）活用のされ方

一部の研究協力者はかなりの頻度で活用したが，結果として活用した研究協力者は登録した研究協力者の１割程度であった。しかし多くの研究者は，科目となった場合は，履修する学生は活用すると考えていた。

4）学習支援活動

この評価項目は，ほぼ全員の評価は低く，実際の試用時期での学習支援活動はできなかったと評価していた。また，e- センターの管理にあたった研究者は，サイト管理に追われ，学習支援はほとんどできなかったと報告した。

5）実施に向けての評価

「カリキュラムに組み込むとボランティアの意義が失われるのでは」との意見もあった。しかし，多くは，ボランティアを通じて社会の人々の生活に視野を広げ，社会的責任性を学ぶ「サービス・ラーニング」の教育的意義を考え，カリキュラム化することに肯定的な意見を述べた。実施計画では，選択科目が望ましく，学生が自らのボランティアの考え方に基づいて，選択か否かを考えればよいとの意見が出された。e- センターを活用しながらも，カリキュラム化する場合は，対面のミーティングの必要性があることは多くの研究者の一致した意見であった。

Ⅳ．考察

研究協力者と研究者の評価に基づき，e- センターでの学習支援プログラムをカリキュラム化する根拠と課題を考察する。

1．e- センターでの学習支援プログラムのカリキュラム化の根拠

2007 年度から一般学習サイトは常にアクセスがあり，現在もアクセスされている。一般学習サイトの開発には学生の意向が反映されていること，また広く社会で年々活動者が増加していることも報告されており（日本青年奉仕協会，2005），“ボランティア”が社会に浸透してきていることも背景となって“ボランティア”に関するサイトへのアクセスが継続していると考えられる。大学の新入生にとって，e- センターの一般公開のボランティア学習サイトは，ボランティア準備の学習の場として評価できる。

活動ログを利用した研究協力者は，ボランティアの経験を残すことの意義を自覚して記録をしていた。活動ログには，ボランティアする対象や対象のもっている問題を理解した状況が記述されていた。活動中に考えたことや感じたことにはじまり，今後の活動計画や，解決すべき問題点が研究者への質問として記述されており，研究協力者の考えが発展する様子が示されていた。学生の活動と活動中の思考過程を記録することで，活動ログが，振り返りを可能にすることができ，学習支援に有用であると評価できる。ボランティアでの学びは，サービス・ラーニング先進国ですでに，教育実践で報告されていており，この報告とも一致していた（松谷他，2004）。

カリキュラム化することによって，e- センターで自らの活動ログ作成し，学生自身が，ボランティア体験を振り返ることが体験を広げ，新たなことに気づき学ぶことができる。さらに，学生間や教員とボランティアで経験したこと，考えたこと・感じたことを意見交換や議論が

できることは，さらなる経験からの学びが期待できる。

学生サイトに登録した研究協力者は122名であったことを考慮すると，ボランティア活動から学ぶ志向をもつ学生の数は少なくないと考える。これら学生のボランティア活動からの学習ニーズに，大学が，ボランティア学習を科目として準備することは，重要である。また，学生の学習ニーズのためのみならず大学の地域社会貢献活動であると考える。

2．e- センターを活用してのカリキュラム化するための課題

1）ボランティアの本質理解の課題

サービス・ラーニングとして科目にする際の根本的課題として，ボランティアは無償性の一市民としての活動であるというボランティア本来の性格を損なわないということがある。研究者のなかに，活動のボランティア性がカリキュラム化によって損なわれるのではと危惧する意見もあった。科目準備には，学生がボランティア活動自体の本質を十分に理解できるよう，学習目的・目標を明確にすることは，重要な課題であると考える。学習目標を学生自身が，他者や地域のためにできることで活動し，その活動から一市民の責任と地域貢献ができることを学ぶこと，とすべきであると考えられた。

2）学生間での活動の共有化の課題

研究協力者である学生との評価面接では，ボランティア体験を学生間で共有化をしたいという要望が聞かれた。ボランティア学生内で体験の共有化ができる機会を提供できるよう考える必要がある。共有化には，e- センター内での共有化と，直接的な意見交換の場での共有化の機会を提供する必要性がある。

米国でのサービス・ラーニングを導入している大学の視察では，経験から学ぶ手法はリフレクション（振り返り）であり，リフレクションは単位認定者である研究者が中心に行い，学生間のディスカッションや面接などさまざまな方法が組み合わされていたことが報告されている（田代他, 2007b）。学びの過程に，多様なコミュニケーションの機会を提供することは課題である。

3）学生と研究者のコミュニケーションの課題

e- センターを試用した研究協力者が研究者に送ったボランティア活動における疑問メールに対し，即時に対応できないことがあった。限られた担当研究者が通常教育活動のなかで，即時にメール質問に対応するには限界があった。研究者が適切なタイミングで活動ログへの反応や質問に回答することは，学習支援活動にとっては重要である。

Web での学習の場合，しばしば学生が継続できず，単位修得に至らない場合が報告されており，Web での教育・指導を訓練された指導者である e- メンターの重要性が論じられている（松田他, 2007）。履修生がボランティア活動から学ぶためには履修生の活動の継続が重要であり，学生と研究者間の適時のコミュニケーションは，学生が活動を継続する重要な一要素と考えられる。加えて，学生が経験から学ぶ過程には教育的支援が重要である。

研究者は年間や週間の時間的枠組みのなかでなら対応可能であると考えていた。研究者のみならず，e- メンター，e- アドバイザー体制は重要と考えられる。

学習支援を可能にする e- メンター，活動の質問に対応してくれるアドバイサー研究者を配置すること，活動報告期間の設置など，大学全体の暦のなかでの学習支援の環境づくりは課題であると考えられた。研究者や e- メンターにとって，サービス・ラーニングや e- ラーニングは新たな教育方法であり，研究者やメンターへのこれらの教育方法について研修できる機会をつくることは課題である。

4）Web の学生のアクセスの課題

研究協力者のうち，１割程度しか e- センターを試用しなかった。e- センターを利用しやすくするためには，携帯電話のメールでもアクセスできるようにする必要がある。

ボランティア学生は，活動の帰り道に携帯電話のメールで活動ログを作成できるのであれば記録するかもしれないと報告していた。携帯電話のメールは字数が限られることや，大学のインターネットコミュニケーションの環境を検討する必要があり，今後の課題である。

3．科目概要案の作成

e- サービス・ラーニングを科目にするために，課題を考慮して，科目概要を作成した。

科目は，１～２年生の教養課程にある学生を対象とした。履修生が自らのボランティア活動の考え方を大事にしながら，自らボランティア活動を振り返り学ぶコース「ボランティア活動から学ぶ人々の生活」とした（表５）。

この科目の目標は，キャンパスを出て地域社会でボランティア活動を通じて地域社会の人々の生活と自らも社会の一員（市民）としての責任を学ぶこととした。ヘルス・ボランティアは，対人関係やコミュニケーションに基づいて行われることであり，自己内の振り返り，Web 上でのコミュニケーション，加えて，その学びを履修する学生・研究者間での共有化とさらなる学びは重要であると考え，Web 上学習と対面学習を組み合わせた科目として作成した。詳細は，シラバスに記述したとおりである。

Ⅴ．おわりに

2002 年から，看護学生のヘルス・ボランティアとしての活動からの学びを支援するプログラムについてボランティア学生の学習ニーズに基づいて指針を作成し，さらに，2005 年から Web 上での学習支援プログラムとし

表５　シラバス案

科目名：総合科目Ⅲ（生活科学論）　　選択 / ２単位
ボランティア活動から学ぶ人々の生活　　１～２年　（前・後期）
担当教員：　　アドバイザー教員：

目標：この科目の目標は，キャンパスを出て地域社会でボランティア活動を通じて地域社会の人々の生活と自らも社会の一員（市民）としての責任を学ぶことです。
方法：履修生が行っているボランティア活動を Web で活動日誌（ログ）を書きながら振り返り，学期の中間と終了時に，学生間での意見交換を行う。
・履修条件：無償のボランティア活動をしている，あるいは予定している学生が履修してください。
・ガイダンスと Web でボランティア学習（5 回），活動ログ開始時，中間，最終時のミーティングに出席する。
・ボランティア活動に 6 回 /18 時間以上参加し，毎回活動記録（ログ）を作成し担当教員に送付する。
・複数の異なる活動でも履修できます。
・集中的なボランティア活動の場合は事前に担当教員と相談してください。
内容：コミュニティサービスの重要性，ボランティア活動の理論と技術，ボランティア活動の振り返りと学び
評価：学習・活動ログ（50%），ミーティング参加度（30%），最終ログ（20%）
教材：Web 上ヘルスボランティア・コミュニティー e- センター
参考：M・マグレガー，他著，大阪ボランティア協会監修（2004）ボランティア・ガイド，誠信書房
佐々木正道編著（2003）大学生とボランティアに関する実証的研究，ミネルヴァ書房

	日時	（講義）内容	備考
1	4 月 オリエンテーション期間	ボランティア活動と人々の生活　ガイダンス （地域での人々の生活とボランティア活動，Ｗｅｂの登録と使い方，経験を学びにするための言葉にすることの重要性とログの勧め）	メディア室 ガイダンス
2		ボランティアとは何か？：ヘルス・ボランティアの理解（１） ボランティアとは？ボランティアの基本姿勢	Web 学習とログ
3		ヘルス・ボランティアとは何か？：ヘルス・ボランティアの理解（２） 地域市民の健康とボランティア（ヘルス・ボランティア）	Web 学習とログ
4		ヘルス・ボランティアの理解（３）： コミュニケーションについて，コミュニケーション・レッスン	Web 学習とログ
5		ヘルス・ボランティアの理解（４）： 活動を地域で安全にするために	Web 報告とログ
6	7 月第 1 週	ボランティア活動について：私のボランティア活動紹介	ミーティング
7		ボランティア活動（１）ログ報告	Web 活動ログ
8		ボランティア活動（２）ログ報告	Web 活動ログ
9		ボランティア活動（３）ログ報告	Web 活動ログ
10	10 月第 1 週	ボランティア活動：ボランティア活動でわかった人々の生活	ミーティング
11		ボランティア活動（４）報告	Web 報告ログ
12		ボランティア活動（５）報告	Web 報告ログ
13		ボランティア活動（６）報告	Web 活動ログ
14	1 月第 2 週	ボランティア活動（10）グループでの学習発表会： ボランティアで学んだ人々の生活と地域の一員としてできること	ミーティング
15	1 月末日	ボランティア・まとめのミーティングの最終報告ログ： ボランティアで学んだ人々の生活と地域の一員としてできること	Web 報告 最終記録

て試用し，評価した。2009 年度から教養科目として開始する。学生がこの選択科目を履修することによって，地域の人々とその生活への理解が深まり，看護学を専門的に学習できる基礎的能力を養うことを期待している。また研究者として，新たな科目での学習支援実践と評価を重ねて，さらにサービス・ラーニングおよび Web を基盤とした学習支援方法を発展させていければと考えている。

謝　辞
本研究は多くの協力者に支えられた。特に，Web 開発時協力してくださった学生代表，宇田川愛さん，高橋雅実さん（前聖路加看護大学看護学部），受け入れ機関，竹内泉さん，中村かおりさん，西野理英さん，寺田麻子さん（聖路加国際病院），そして渡部通子さん，高木佳子さん，山賀正康さん（株式会社ムーンファクトリー）に感謝する。この研究は平成 17 ～ 20 年度の科学研究費助成金により行った。

引用文献

香春知永，他（2005）．ヘルス・ボランティア活動をしている看護学生の学習ニーズと学習支援のあり方．*聖路加看護学会誌*，９（１），11-18.

松田岳士，原田満里子（2007）. *E ラーニングのためのメンタリング―学習者支援の実践*.（14-41）．東京：東京電気大学出版会.

松谷美和子, 他（2004）．看護教育法としての「サービス・ラーニング」―実践研究論文レビュー．*聖路加看護大学紀要*. 30, 31-38.

日本青年奉仕協会編集委員会（2005）．*ボランティア白書 2007*.（11）．東京：社団法人日本青年奉仕会.

佐々木正道（2003）．*大学生とボランティアに関する実証的研究*．京都：ミネルヴァ書房 .

田代順子，他（2007a）. Web 上でのヘルス・ボランティア学習とボランティア学生学習支援プログラム開発―開発過程．*聖路加看護学会誌*. 11（1）, 109-111.

田代順子，他（2007b）．米国におけるサービス・ラーニング（地域参加型教育）の理念と取り組み―ウィスコンシン大学とワシントン大学の視察調査とワークショップ報告．*聖路加看護大学紀要*, 33, 68-73.

Evaluation and Improvement of a Web-based Learning Support Program for Nursing Student Health Volunteers and Development of a Subject used Service-Learning

Junko Tashiro, Yasuko Nagamatsu, Miwako Matsutani
Michiko Hishinuma, Ikuko Oikawa, Yuko Hirabayashi
Kiyomi Asahara, Junko Omori, Yumi Sakyo
(St. Luke's College of Nursing)

Purpose of this study was to provide evaluation data for the improvement of a web-based learning support program for nursing student health volunteers collaboratively developed with students that began January 2007. Based on findings of evaluation, we designed a subject used service-learning. Evaluation methods included: student logs, interview feedback from students who did or did not use the student site, and faculty researchers' evaluation as the support staff for this web-based learning support program. The study was approved by the Institution Review Board at St Luke's College of Nursing (No.07-035). Participants were recruited based on their informed consent and assurance of confidentiality.

Findings revealed that nine students logged 30 reports. Logs described their activities, thinking, learning, and future plans. The PC web-site was unfamiliar to them compared to their mobile e-mail. In addition, they felt no obligation to log their volunteer activities. Most faculty-researchers indicated a low commitment to supporting student volunteers because of their lack of knowledge and expertise in using the educational web-based learning and they recognized they need to learn the technology.

Based on this evaluation, our consensus was to develop a service-learning program for nursing student health volunteers. Developing skills of logging their activities, reflecting and developing their understanding others and importance of help each other as a citizen is paramount during freshman and sophomore years. Skill building in using web-based learning for students and faulty should be added to the next iteration of the program. Further study is needed to examine outcomes of this service-leaning program.

Keywords：health volunteer, service-learning, web-based learning, nursing college student, social participation